

第廿一講 永世不變の道 ことば 彼得前書一章二三—二五節及び以弗所書五章十八節に就いて エペソ (九月十八日)

今秋(大正十年秋)もまた前に引きつゞいて羅馬書の研究をなさんと欲する、第三章は前回を以て研究を終へたこととし、之より第四章の研究に入り度いのであるが、今日は先づ今秋の研究開始の序として聖書全體の性質について一言して置き度いのである、

先づ見るべきは、彼得前書一章の二十三節より二十五節までである。

- (23) 汝等が再び生るゝは(生れしは)朽つべき種に由るにあらず、朽つべからざる種、即ち限りなく保つ神の活ける道 はてしなく によるなり。 (24) それ人は既に草の如く其榮は凡ての草の花の如し、草は枯れ、其花は落つ、 (25)

されど主の道は のべつた かぎりなく保つなり、汝等に宣傳 のべつた する福音は即ちこの道なり。

右の中二十四節は舊約聖書よりの引用であつて、人の榮のうつろひ易きを花にたとへて述べたものである、それと比して福音の永久的なる事を述べられたのである。

今夏信濃杳掛の高原に滞在して、草と花とについて強く感ぜられしことは第一にその美である、これ實に高原に休臥せる間の最大の慰めであつた(他にも種々の良き慰めを得たが)、高原地の特徴は第一に空氣の清澄である、第二に日光の芳烈である、その結果として、彼地にありては草と云ふ草が凡て美はしく、花と云ふ花が悉く佳麗である、特別に良き草と良き花とを求むるに及ばない、平地にありては少しも人の目を ひ 牽かぬ普通の草と花とが山地にありては異常の艷美 えんび を呈して我等の眼を牽くのである、山莊にありて前の原に眼をやる時、そこに立つ凡

ての野生の草と其花が、異常なる美の集團である、杖を曳いて外に出づれば路傍に生へ出でし名もなき雑草が妙なる榮と光の羅列である、野にも山にも庭にも路にも我等はかく植生の美に圍まるゝのである、平地にありて平凡なる者が高原にありて斯く佳麗なるは、云ふまでもなく空氣の清さと日光の芳しさに基因するものである、神の靈は清き空氣である、神の愛は芳しき日光である、之に包まれ之に接しては人の世に於ては如何に劣れると見ゆる人も美と光とを放つのである、あゝ思ひ出づるは天國の光景である、その空氣、その日光、神の靈と愛と光とを眞正面まともに受くる時の人の輝きは如何、高原にあらば美はしかるべき花も平地にありては平凡無味である、これ空氣濁り日光惡しき爲である、此世は靈的意味に於て空氣濁り日光惡しき處である、故に此世にありては天國にては優秀なるべき人も庸劣凡愚と見ゆるのである、げに此世にては或特別の天才者の外は孰れも皆雑草である、あるに甲斐なきものである、併し乍ら、世革あらたまりなば如何、新しき天と新しき地と出現しなば如何、その時こそ、其世界に於てこそ雑草の一つ一つが妙なる光を浴びて立つのである、何の見ばえもなかりし者が靈妙の光を以て輝き出すのである、高原の空氣と光とは凡ての雑草の眞の値を發揮する、天國の空氣と光とは其處に住む凡ての靈魂の眞の値を發揮する、されば失望する勿れ、此世に於て榮なき者よ！時ひとたび來らば、汝の平凡は非凡となり、汝は或は眞珠として或は金剛石として或は碧玉として燦たる光輝を放つに至るであらう、それまでの此世の旅は忍耐である、忍耐を以てする信仰の持續である。

花を基督者に比して其の天國的價值を思ふと共に、之を此世の實相に比して微笑の禁じ難きものがある、花の榮の如く急速に消長するものはない、或る時は一の花が他の凡てを壓して全盛を誇る、それは正に王の榮であつ

て他の花はあれども無きが如くである、しかし其期間は長くない、あるものは數日、あるものは一日、そして他のものに代はられるのである、シモツケソウよりメタカラコウ、シンウドよりキキョウ、マツムシソウよりカルカヤ、ツリフネソウよりススキへと代り行くのである、かくして各自の全盛期は極めて短く甲より乙、乙より丙、丙より丁へとつねに移り行くのである、之此物質世界のつねの姿である、茲には何もものも常なるはない、無常が即ち此物質世界である、全盛期は極めて短時日、そして他に代はられるのである、政治界を見よ、文藝界を見よ、謂ゆる思想界を見よ、常に流行の問題があり、全盛の人がある、そして短時日にしてそれが他に移りゆく、昨の王は今の奴僕である、今の天才は明の凡愚である、變轉萬化、常なき事の如何に著るしきよ！

新人の新思想とよ！ 然り或時はオイケン、或時はベルグソン、或時はタゴール、ある時はラッセル、其著書の売行大なるは世の大なる評判となり、其新思想出で遂に人類の救ひ成れりと思はるゝほどである、その時舊き福音は何となく光彩を失ひし如く感ぜられる、パウロの唱へ、オーガスチンの立て、ルーテルの改め、ミルトンの堅く信じたる此福音は遂に世を救ふ教にあらざるかとの疑惑が起る、併し乍ら「昨日も今日も永遠變らざる」ものはキリストの福音であつて、昨日も今日も永遠變りつゝあるものは此世の思想である、見よ新人の忽ち舊人となるを、又新思想の忽ち舊思想となるを、デモクラシーの聲は一時世界を覆へす如くであつたが、其後勞働問題全盛の世となり、今や勞働問題も既に下火となりつゝありと傳へらる、恐くは是れまた到底人力を以て解き難き問題として、倦怠のうちに忘れ去らるゝことであらう、此次は宗教問題か、或はそうであらう、よし宗教問題全盛の世となりても勿論これ福音全盛の世となつたのではない、これ此罪の世の謂ゆる宗教問題であつて、決し

て我等の云ふ所の宗教問題ではない、これ神が人を救ふ所の福音の教とは全く相反するものであつて、人が人を救はんとする愚なる計畫の聲たるのみである、かく世の思想は常に變轉する、そして此の常に變轉しつゝ來りし世の思想とは全く別の流れをなして千九百年の間變らずして今に至りしものが即ちキリストの福音である、これ實に歴史の頁に刻みこまれし強き基督教證據論である、福音の強味は斯く歴史の上に證明せられた、他の凡て變る中にありて常に變らざる福音の價值を千九百年の歲月が立證する、恒に變るは人の教、恒久にして變らざるは神の教である。

この事を知りて彼得前書一章二三—二五節を讀めば其意味は鮮かに我等の心に入る、肉につける生活は死である、故に再生は是非ともなくてはならぬ、併し再生は新生である、これには適當なる種子を要する、福音は新生を促す所の種子である、しかも「朽つべき種」ではない、「朽つべからざる種」である、即ち「限りなく保つ神の活ける道」である、これ即ち福音である、そして之を文字を以て示せしは聖書である、そして人は草の如きもの、其榮は草の花の如きものである、「草は枯れその花は落つ」、人は枯れ其榮は落つる、人と其榮は常に亡び、常に消え、常に移りゆく、たゞ「主の道は限りなく保つ」のである、主の道とは何ぞ、これ宣傳へらるゝ所の福音である、そしてそれを文字にて現はせしは聖書である。

聖書の研究とは他なし、他の凡て保たざる中にありての此の「限りなく保つ神の活ける語」の研究である、かく限りなく保つ神の言の研究なればこそ、聖書研究には特殊の價值と歡びとが伴ふのである、福音は世の表面をおもて動かさずして其下を流れてゆく、活ける泉は何の時代に於ても俗眼の達せぬ所に潜んでゐる、そして世の外面が

常に變りつゝある間を、終始一貫して恒久の姿を呈しつゝあるは福音である、げに神の爲し給ふ所と人の爲す所とは天地の差がある、靜なる水を以ておもむく徐に谷を掘り岩を削り以て地の姿を變へ給ふ神は、靜かに福音を此世の奥に潜ませて之を以て徐々として、しかし不斷に永久的に聖圖を進め給ふのである、この福音の研究であれば、また此限りなく保つ神の活ける語の研究であれば、我等又靜かに、しかし怠らずた撓まずして進みゆくべきである。然らばこの神の活ける語の研究法如何、この問題に答ふる語として以弗所書五章十八節を見ることが出来る。

また酒に酔ふこと勿れ、之を爲すは放蕩なり、宜しくみたま靈に満さるべし、

とある、これは聖書が酒を禁じたる所と見られ得る、果して然らば是れ禁酒運動の標語として頗る適切なるを思はしめる、しかし「酒に酔ふこと勿れ宜しく靈に満たさるべし」と酒と聖靈とを對照させたのは果して如何であらうか、聖靈は人の魂の内底に加へらるゝものである故、これに相對して「酒に酔ふ勿れ」と云へば實際の醉酒の事に止まらず、凡て外部の刺戟に酔ふ勿れの意であると思はる、即ち人力の工夫を以てする外部的の刺戟に心を奪はるゝ勿れの意であらう、此意味に於て酒に酔ふは「放蕩」であると云ふ、放蕩は今日の日本語に於ては放縱汚行を意味する語であるが英語聖書には riot と譯してあり、原語は *riot* (アソーチア) であつて過度、亂れの意味を有してゐる、外部的の刺戟に酔ふは「亂れ」であると云ふのである。

此世の事は多くは酒に酔ふこと即ち人力を以てする外部的刺戟に酔ふことである、殊に此世に入り換り立ち換りて起りて強く世人の注意を牽く處の政治運動、社會運動、思想運動、宗教運動の類は概ねこれ酒に酔ふことである、人間的工夫に訴へ外部的の刺戟を以て元氣と熱情とを煽ることであつて、一時遽然として火の如く燃えた

てど後ち又遽然として消滅し後は石の如き冷枯と死の如き疲憊あるのみである、これ即ち「放蕩」（過度、亂れ）である、聖書の研究には此の如き外道的刺戟の道は全然棄て去るべきである。

「酒に酔ふ勿れ……靈に滿さるべし」と云ふ、酒と聖靈が對照され又酔ふと滿さるとが對照されてゐる、酔ふ勿れ寧ろ滿たされよである、外部的手段より刺戟を受けて酔はずして魂の中に聖靈を以て滿たされよである、底深く神の靈を貯へ滿たして内の底より力を養へよである、恰も清く爽かなる空氣の中に我肉體を涵して何となく身も心も滿たされしを感じずるが如く、聖靈の中に我靈魂を深々と涵して之を以て魂の髓と膏とを養ひ且滿たさるゝのである、かくする時は今まで不可解なりし聖書も解し得られ、今まで眞と信じ得ざりし奇蹟も眞と信ぜられ、今まで疑惑を以て對し來りし福音の根本的教義も、恰も陰鬱なる雨期の後に秋空の曠然として霽れわたりしを仰ぐが如くに鮮かに感得せらるゝのである。

聖靈を受けずして、唯學者としてののみ聖書を學ぶは害多くして益少い、聖書を學問的に研究するにも聖靈に充たされずしては眞の研究は出来ない、まして信仰的研究をや、實に聖靈を受けて研究して初めて聖書を解し得るのである、之なくしては萬卷の註解書も我等をして聖書を眞に味解せしむべく不適當である、但し世にはリバイバルと稱して聖靈に酔ふことを以て信仰の主眼とする人がある、しかし以弗所書の明示する通り聖靈は魂を滿たすべきものであつて、之を以て我を酔はしむべきものではない、聖靈降れりと稱して狂喜亂舞あらゆる騷態を演ずるは健全なる道ではない、これ果して眞に聖靈に動かされたのであらうか、むしろ是れ酒に酔ひしものではないか、即ち人間の工夫を以てする外部的刺戟の一變態ではあるまいか、聖靈は靜かに深く滿さるべきもの

であつて決して浅く騒がしく酔はさるべきものではない、酒に酔ふこと勿れ之をなすは放蕩なり宜しく聖靈に満さるべし、である、酔ふことは凡て過度と亂れである、我等は何ものにも何運動にも——よし聖靈と稱せらるゝものにさへも——酔つてはならない、宜しく靜かに深く聖靈に満たさるべきである、これ聖書の研究について肝要なる注意なると共に、又信仰的生活全體についての誠めとして反覆考察すべき一事である。

聖書は永久變らざる書である、他の書は癩癩れても聖書聖書だけは癩癩らない、然り、他の書は悉く癩癩りて聖書丈丈けが残るのである、聖書は我等の學ぶべき唯一の書である。

この秋も、前回に続いて羅馬書の研究を進めていきたい。第三章は前回で終わりとし、これから第四章の研究に入りたいと思うが、今日はまず秋の研究を始めるにあたつて、聖書全体の性質について一言触れておきたい。

最初に注目すべきは、ペテロの手紙 第一章二十三節から二十五節までである。

(23) あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく朽ちない種からであり、生ける、いつまでも変わらない神のことばによるのです。

(24) 「人はみな草のよう。その栄えはみな草の花のようだ。草はおれ、花は散る。(25) しかし、主のことばは永遠にたつてみちる。」あなたがたに宣べ伝えられた福音というのば、このことばです。

このうち二十四節は旧約聖書からの引用であり、人間の栄華が移り変わりやすいことを花に例えて述べたものである。それと比較して、福音がいかに永久的であるかが語られている。

この夏、信濃の沓掛の高原に滞在し、草や花について強く感じたのは、まずその美しさであった。休養している間の大きな慰めとなつた（他にも多くの恵みがあつたが）。高原の特徴は、第一に空気の清らかさであり、第二に強い日光である。その結果、現地ではどの草も美しく、どの花も鮮やかである。特別な草や花を探す必要はない。平地では人の目をひかない普通の草木が、山地では素晴らしく美しい姿を見せて心をひきつける。山荘から前の原っぱを見渡すと、生えている野草や花が美しい集まりをつくっている。杖を持って外に出れば、道端の名

もない雑草が美しい光をまといて並んでいる。野にも山にも庭にも道にも、生きものの美しさに囲まれる。平地では平凡なものが高原でこのように美しくなるのは、言うまでもなく澄んだ空気と芳しい日光のおかげである。

神の霊は清い空気であり、神の愛は芳しい日光である。これに包まれ、触れるとき、人間世界ではどんなに貧しく見える人であっても、美しさと光を放つようになる。思い出すのは天国の光景である。その空気、その日光、神の霊と愛と光を正面的に受けとめるときの人々の輝きはいかばかりであろうか。高原なら美しいはずの花も、平地では味気ないものになる。空気が濁り、日光が乏しいためである。この世は霊的な意味で空気が濁り、日光が届きにくい場所である。そのため、天国であれば優れた人であっても、この世では平凡で愚かに見えてしまう。実にこの世では、特別な天才を除けば誰もが雑草であり、取るに足りない存在に見える。しかし、時代が改まったらどうなるだろうか。新しい天と新しい地が現れたらどうだろうか。そのときこそ、その世界において雑草の一つ一つが美しい光を浴びて立つ。見栄えのしなかった者が、霊的な光をもって輝き出すのである。高原の空気と光が雑草の本当の価値を引き出すように、天国の空気と光はそこに住むすべての魂の本当の価値を引き出す。だから、この世で栄えのない者たちよ、失望してはならない。時が来れば、あなたの平凡さは特別なものとなり、真珠として、ダイヤモンドとして、あるいは碧玉として眩しい光を放つようになるだろう。それまでのこの世の旅は忍耐であり、忍耐をもって信仰を保ち続けることである。

花をキリスト者に例えて天国での価値を考えると同時に、これをこの世の現実引き当てて見ると、思わず苦笑してしまうような面がある。花の栄えほど急速に移り変わるものはない。あるときは一つの花が他のすべてを

圧倒して咲き誇る。まさに王の栄華のようであり、他の花は存在しないかのである。しかしその期間は長くはない。あるものは数日、あるものはたった一日で、他の花に取って代わられる。シモツケソウからメタカラコウ、シンウッドからキキョウ、マツムシソウからカルカヤ、ツリフネソウからススキへと移っていく。このように、それぞれの花の全盛期はきわめて短く、次から次へと主役が変わっていく。これが物質世界のいつもの姿である。ここには永遠なものは何もない。無常こそがこの物質世界そのものである。全盛期はきわめて短く、すぐに他のものへ移る。政治の世界を見よ。文学の世界を見よ。いわゆる思想界を見よ。常に流行の話題があり、もてはやされる人がいるが、短い期間で他へ移っていく。昨日の王は今日の召使いであり、今の天才は明日の凡人である。目まぐるしく変化し、定まらないことの激しさは驚くほどである。

新しい思想家たちの新思想はどうだろうか。あるときはオイケン、あるときはベルグソン、あるときはタゴール、あるときはラッセル。その著書が売れると世間で大きな評判となり、新思想の登場によってついに人類の救いが実現したかのように思われる。そのとき、古い福音は何となく輝きを失ったように感じられる。パウロが語り、アウグスティヌスが立て、ルターが改め、ミルトンが強く信じたこの福音が、ついに世を救う教えではなかったのかという疑いが湧く。しかし、「昨日も今日も永遠に変わらない」ものはクリストの福音であり、昨日も今日も絶えず変わり続けているのがこの世の思想である。見よ、新しい人があつという間に古い人になり、新しい思想がすぐに古い思想になるのを。民主主義（デモクラシー）の話題は一時世界を覆うようであつたが、その後は労働問題が中心の時代となり、今や労働問題もすでに勢いを失いつつあると伝えられる。おそらくこれも人道

的な努力では解決しがたい問題として、関心が薄れる中で忘れ去られていくのだろう。その次は宗教問題だろうか。あるいはそうかもしれない。仮に宗教問題が時代を中心になったとしても、決して福音の時代になったわけではない。これはこの罪深い世の中のいわゆる「宗教問題」であって、私たちが言う宗教問題ではない。神が人を救う福音の教えとは全く正反対の、人間が人間を救おうとする愚かな企みの声に過ぎない。このように世の思想は常に変化する。そして、この激しく変わり続けてきた世の思想とは全く別の流れを保ち、一九〇〇年の間変わらずに今に至ったものこそが、キリストの福音である。これこそ歴史に刻まれた強いキリスト教の証明である。福音の強さはこのように歴史の上に証明された。他のすべてが変わっていく中で、常に変わらない福音の価値を一九〇〇年の年月が証明している。常に変わるのは人の教えであり、永遠に変わらないのは神の教えである。

このことを知ってペテロの手紙第一章二十三―二十五節を読むと、その意味が明確に心に入ってくる。肉体に従う生活は死である。だからこそ、新しく生まれることがどうしても必要である。しかし新しく生まれるには、適切な種が必要となる。福音は新しい命をもたらす種である。しかも「朽ちる種」ではなく、「朽ちない種」である。つまり「生ける、いつまでも変わらない神のことば」である。これこそが福音であり、それを文字として示したのが聖書である。人間は草のようなものであり、その栄えは草の花のようなものである。「草はしおれ、花は散る」。人は衰え、その栄えは消える。人間とその栄華は常に滅び、常に消え、移り変わっていく。ただ「主のことばは永遠に立ち続ける」のである。主のことばとは何か。宣べ伝えられる福音である。そしてそれを文字で表したのが聖書である。

聖書の研究とは他でもない。他のすべてが崩れ去る中で、この「生ける、いつまでも変わらない神のことば」を調べることである。このように永遠に残る神のことばの研究だからこそ、聖書研究には特別な価値と喜びが伴うのである。福音は世の表舞台を動かすのではなく、その下を流れていく。生きた泉はどんな時代であつても人の目の届かないところに潜んでいる。そして世の外側が常に変化している間も、一貫して変わらない姿を保ち続けているのが福音である。本当に、神のおこなわれることと人間のすることには天地の差がある。静かな水によってゆっくりと谷を削り岩を削って地の姿を変えていかれる神は、静かに福音をこの世の奥深く潜ませ、これによって少しずつ、しかし休むことなく永遠の計画を進めていかれる。この福音の研究であり、永遠に変わらない神のことばの研究であるならば、私たちもまた静かに、しかし怠らずにたゆまず進んでいくべきである。

それでは、この神の生ける言葉をどのように研究すればよいだろうか。この問いに答える言葉として、エペソ人への手紙五章十八節を見ることができる。

また、ぶどう酒に酔つてはいけません。そこには放蕩があるからです。むしろ、御霊に満たされなさい。とある。これは聖書が酒を禁止している箇所と見ることもできる。そうであれば、禁酒運動の標語として非常にふさわしいものと思われる。しかし、「ぶどう酒に酔つてはいけません……むしろ、御霊に満たされなさい」と、酒と聖霊を対比させたのはなぜだろうか。聖霊は人の魂の奥底に与えられるものであるため、これと対比して「酒に酔うな」と言うとき、単に酒を飲んで酔うことにとどまらず、すべての外的な刺激に酔つてはならないという意味であると考えられる。つまり、人間の工夫による外からの刺激に心を奪われてはならないという意味である

う。この意味において酒に酔うことは「放蕩」であるという。放蕩という言葉は、現代の日本語ではだらしのない行いを意味するが、英語聖書では *riot* と訳され、原義のギリシア語（アソーチア）は「行き過ぎ」「乱れ」という意味を持っている。外的な刺激に酔うことは「乱れ」であると言っているのである。

この世の出来事の多くは、酒に酔うこと、すなわち人間の工夫による外的な刺激に酔うことである。特に、この世で代わる代わる起こって人々の注意を強くひく政治運動、社会運動、思想運動、宗教運動の類は、概ね「酒に酔うこと」である。人間的な工夫に頼り、外的な刺激によって元氣や情熱をおさるものであって、一時的には激しく火のように燃え上がっても、後には急に消えてしまい、後は石のような冷たさと死のような疲労が残るだけである。これこそが「放蕩」（行き過ぎ、乱れ）である。聖書の研究においては、このような外的な刺激に頼るやり方は完全に捨て去るべきである。

「酒に酔うことなかれ……御霊に満たされよ」と言う。酒と聖霊が対比され、また「酔う」と「満たされる」が対比されている。酔うのではなく、むしろ満たされよということである。外的な手段から刺激を受けて酔うのではなく、魂の中に聖霊を満たしなさいということである。心の奥深く神の霊を蓄え満たし、内部から力を養いなさいということである。ちょうど、清く爽やかな空気の中に自分の体を浸して、何となく身も心も満たされるのを感じるように、聖霊の中に自分の魂を深く浸し、これによって魂の深いところを養い満たすのである。このようにするとき、今まで理解できなかった聖書も解解できるようになり、今まで本当だと信じられなかった奇跡も信じられるようになり、これまで疑問を持って接してきた福音の根本的な教えも、あたかも薄暗い梅雨の後に

秋の空がすっきりと晴れ渡るのを仰ぐように、鮮やかに理解できるようになるのである。

聖霊を受けずに、単なる学者としてののみ聖書を学ぶのは害が多くて益が少ない。聖書を学問的に研究するにしても、聖霊に満たされなければ本当の研究はできない。まして信仰的な研究においてはなおさらである。実に聖霊を受けて研究して初めて聖書を理解できるのである。これがなければ、膨大な注釈書であっても、私たちが聖書を本当に味わい理解するのには不十分である。ただし、世の中にはリバイバルと称して、聖霊によって興奮することを信仰の中心とする人々がいる。しかし、エペソ人の手紙が示している通り、聖霊は魂を満たすべきものであって、自分を興奮させるためのものではない。聖霊がくだったと言って狂喜乱舞し、騒がしい様子を見せるのは健全な道ではない。これは果たして本当に聖霊に動かされたのだろうか。むしろ酒に酔った状態と同じではないだろうか。つまり、人間の工夫による外的な刺激の一種ではないだろうか。聖霊は静かに深く満たされるべきものであって、決して浅く騒がしく興奮させるものではない。「酒に酔ってはならない。それは放蕩である。むしろ聖霊に満たされなさい」ということである。興奮することはすべて行き過ぎであり乱れである。私たちは何ものにも、どんな運動にも―たとえ聖霊と呼ばれるものにさえも―興奮してはならない。静かに深く聖霊に満たされるべきである。これは聖書の研究についての重要な心構えであるとともに、信仰生活全体についての戒めとして繰り返し考えるべきことである。

聖書は永遠に変わらない本である。他の本が廃れても、聖書だけは廃れない。実に、他の本がすべて消え去っても、聖書だけが残るのである。聖書は私たちが学ぶべき唯一の本である。

